嫁の生家訪問と祖父母と孫の関係

——新潟県旧朝日村の事例から——

蓼沼　康子

1. 問題と方法
2. 調査地の概況
3. 子どもの成長と祖父母
4. 嫁の生家の持つ意味
5. 結語

1. 問題と方法

本稿の目的は，日本の家族の中で，婚出後も女性が頻繁に生家を訪問し，日常的にも密接な関係を保ち続ける地域の家族を，そこに誕生した子どもと祖父母とのかかわりという視点から検討することである。

調査対象地域は，新潟県岩船郡旧朝日村の下新保および高根である。三世代家族における子育てに祖父母の果たす役割については，現代社会においても重要な意味をもっているのが現状であるが，伝統的日本社会においては嫁が労働力と考えられていたという点からも重要なものとされる。さらに，「家」の継承という点からも祖父母と孫の関係への検討が必要と考えられる。

調査地域は，婚出後も女性が生家とのかかわりを保ち続けることを特色としている。日本の家族関係を考えていく上で，「家」の継続という視点から重視されてきた親子関係とは異なる親と娘との関係が認められる地域である。日本の家族研究は，これまで「家」の問題を中心として進められてきた。集団としての「家」の枠組みや機能にその研究の関心は集中していたといえる。その結果，日本の家族や日本社会への理解が可能となったのである。しかしその反面，「家」の枠組みを超えた関係を描き出してこなかったということもいえる。そこで，「家」の論理を超えた家族研究のひとつとして婚出女性と生家との関係が注目されてきた。

超世代性と永続性を原理とする「家」は，そのためにも婚入者を必要としてきた。日本の婚姻は，女性の帰属変更ととらえられ，女性たちは，婚姻の成立とともにその帰属を生家から婚家へと移し，婚家の新たな成員としての生活を始めた。嫁入婚の一般的な形態においては，婚礼の日

から婚家での暮らしを始める嫁たちは，急激な生活の変化，そして一方的な婚家への適応を強いられた。しかし，日本の婚姻も地域による多様性をみせる。婿入婚から嫁入婚へという民俗学で通説とされてきた婚姻の歴史的要因も含めて，婚姻の成立に時間的経過をもつ地域も存在した。タルイレやキメザケと言われる婚約の成立後に，生家と婚家を往復する女性たちや，嫁として引き移った後にも自分の荷物は相変わらず生家に留めておくことが行われた。

「家」にとって重要とされる先祖祭祀や死者供養に，婚出した女性たちが関係する事例も存在する。先祖祭祀は，家の継承者がその権利をもち，それが継承者であることの認知にもなっている。位牌分けや北陸地方に広くみられるコンゴウマイリや奈良県に報告のあるトウマイリ，和歌山県紀ノ川流域などで報告されたモライマツリなど，婚出した者たちによる死者供養も行われてきた。

以上のように，日本の家族を特徴づけ，超世代的に継続していくことを重視した「家」においても，婚出女性の存在が機能を果たしてきたことが明らかにされてきた。

婚出女性が生家との関係を婚出後も保ち続けていくと，そこに誕生した孫といわゆる母方の祖父母との緊密な関係が成立する。頻繁に訪ねてくる外孫との関係は，家の継承にはかかわらない関係である。しかし，その心理的な距離は，きわめて近いと考えられるが，その関係ははたしてどの程度まで継続するのであろうか。

祖父母と孫という隔世代関係は，親子関係の緊張感の緩和という役割も果たす。あるいは，親子関係とは異なる形での伝統や生活様式の伝達に祖父母が役割を果たしてきた。かつての日本社会にあって，嫁は一家の重要な労働力と考えられていた。嫁となった女性に対する期待は，後継ぎの出産と同時に生産活動への寄与であった。嫁たちは，朝一番早くから夕方遅くまで農作業に従事することが期待されていた。そこでは，育児やしつけは嫁の役割とは必ずしも考えられていなかった。結果として，育児担当者は，祖父母となることが多かった。近年においても，調査地高根では，子どもが生まれたら，祖母が仕事をやめて育児を行い，母親は仕事を続けることが多いとの話も聞かれた。

このような関係は，時間を経たのちに新たな形をみせることもある。長崎県対馬の隠居制家族においては，幼い頃面倒をみてもらった祖父母が年老いたときには，祖父母が隠居屋から母屋にもどり，孫夫婦とともに暮らすという制度が存在した。対馬においても重要な労働力と考えられていた嫁たちが仕事をしている間，子どもたちの世話は祖父母がおこなっており，ときには隠居屋に移る際に，一番小さな孫を伴っていくこともあった。そのように密接な関係をもった祖父母と孫は，対馬においては心理的な関係としてばかりではなく，制度として居住をともにすることもあった。

現代において，女性が結婚後も生涯にわたって仕事を続けていく場合に，誕生した子どもたちにとって祖父母の存在は看過できない。日本の女性たちの就労は，出産や子育てによる中断をそ

の特徴としているが，中断のない就労形態をみせる地域として三世代同居率の高い山形県や新潟県がある。育児担当者と考えた場合，それは必ずしも直系である必要性はなく，父方母方双方の祖父母の存在は大きい。現在，核家族，とくに夫婦と未婚の子どもたち，という形態を標準世帯と考えられなくなっており，三世代家族を形成する員数は必ずしも減少するばかりではない。今後の日本社会における育児担当者，そして家族にとって祖父母と孫の関係は再考の可能性があると考えられる。

2．調査地の概況

新潟県旧朝日村は，新潟県北部に位置し，山北町を経て山形県と接している。近隣の村上市街地に現在では多くの住民が通勤している。

朝日村は，室町時代には上杉氏の支配下にあり，江戸時代には大部分が天領となっていた。明治34年に塩野町村，猿沢村，高根村，三面村，舘腰村の５村に分かれたが，昭和29年に合併して朝日村が成立した。平成20年４月に村上市に合併された。平成20年３月時点における人口は，13,000人であった。

人口は，青年層を中心とする転出により年々減少する傾向にあり，老齢人口の比率が増加している。

産業としては，三面川と高根川によって形成された肥沃な土壌に恵まれて農業，とくに稲作が中心となってきた。また，養蚕は県下一の生産地である。旧朝日村は，その面積の91．2%が林野であり，林業も農業とともに朝日村の中心的産業となってきた。しかし，農業，林業ともにその就業人口は著しく減少し，第二次産業，第三次産業に従事する者が増加している。産業別就業者数をみると，昭和50年頃より顕著に農業人口が減少し，製造業，サービス業に従事する者が急増している。磐梯朝日国立公園をはじめとする自然環境や鳴海金山跡などの歴史的資産を生かした観光業の開発が期待されている。

調査は，平成４年11月，平成５年10月，平成18年８月に実施した。

（１）高根の概況

高根は，高根川沿いに朝日村では最も奥に位置する村落である。隣村の北大平とも３キロメートル近く離れている。周囲を山に囲まれているが，山の中にも田畑を開き，農業と林業を主たる生業としてきた。村落全体では，田は約100ヘクタール，畑は約10ヘクタール程度であり，山林は6000ヘクタールにものぼる。青壮年層は，村外に通勤するものが多い。

○高根の家族・親族

高根は，一世帯あたりの平均人数は平成５年の時点で4.9人であった。世帯構成は，単独世帯，夫婦家族から四世代同居の直系家族的形態をとるものまで多様である。同世代の既婚夫婦が同居

する例は少なく，直系家族を基本的形態としてきた。相続に関しては長男相続である。高根においては，本分家関係はいつになっても切れるものではないとの認識であるが，同族的な集団を形成しているわけではない。

○高根の伝統的婚姻慣行

高根の伝統的婚姻としては，村内婚が志向されていた。婚出女性の生家訪問である「アソビニユク」という慣行の実施には，村内婚が前提とされている。地主・小作という関係も存在していたが，強大な地主が村全体を支配するという構造ではなかった。配偶者選択は，恋愛によるものと親の意思によるものの双方の形態が存在した。いずれの場合にも仲人をたてて，嫁方との交渉にあたった。仲人は，嫁や嫁方の意思が反映されやすいように母方のオジ夫婦が選ばれることが多かった。

話が決まると，「キマリザケ」の儀礼が行われる。嫁方で，婿方から贈られた酒と肴で，親しい親戚だけを招き披露が行われる。その晩は，嫁は婿方に泊まり，三日目に生家に戻る。「キマリザケ」により，二人の関係は公ものとなり，それ以降半年ほど後の「シュウゲン」までは嫁や婿は双方を往来する。

（2）下新保の概況

下新保は，下村，清水田，高田の三地区からなる。その域内に三面川が流れ，米作中心の農村地帯である。現在では，米のほかに麦や大豆などを栽培しているが，その作付面積は米とは比較にならないほどである。ただし，農家数，農業人口ともに減少の傾向を示し，第二種兼業農家がほとんどである。耕作規模は，1ヘクタール未満が5割を占めている。

下新保の平均世帯員数は，4.12人である（平成14年）。世帯構成は，単独世帯から直系家族世帯まで多様な形態をみせる。ただし，近年の人口減少は顕著で，世帯数の減少に比べて人口の減少が著しい。

本家（オモヤ・ホンケ）分家（イモチ）関係は認識されているが，同族的な集団を形成することはない。また，そこの家から出た人々の集団をマキといい，分家とは区別し交際をしている。

婚姻は，婿方が仲人を依頼し，その仲人が嫁方に承諾を得るために足を運ぶ。嫁方での承諾が得られると「キマリザケ」となる。婚礼の日は，仲人が嫁を迎えに行き，花嫁行列を作って嫁は生家を出発した。花嫁は，婚家の勝手口から草履をはいたまま座敷に入る。座敷で盃事が，嫁・婿・双方の両親・仲人により行われる。嫁入り道具は，そのとき同時に運び込まれた。

3．子どもの成長と祖父母

高根地区には，「アソビニユク」と言われた嫁の生家訪問が行われていた。「アソビニユク」とは，結婚後に夫婦でしばしば妻の生家を訪問することである。これは，朝日村と山北町を経て接

する山形県西田川郡温海町における「シュウトノツトメ」と言われる習俗と類似したものである。この「シュウトノツトメ」は，温海町越沢での報告が佐藤光民「羽越国境地方の婚姻制―シュウトノツトメを中心に」(1956) として報告されて以来注目されてきた習俗である。越沢での「シュウトノツトメ」も，結婚後の夫婦による嫁の生家訪問であり，毎晩のように頻繁にそして活発に近年にいたるまで行われていた。

越沢地区では，配偶者の選択は親によって決められるものであり，本人たちによる選択は認められていなかったという。ほとんどが村内婚であり，かつての祝言は簡素なものであった。越沢は，山間部に位置する山村であり，蕎麦を特産としシナ布の生産を行う地域である。他の集落と同様孤立した村落であった。嫁たちは，祝言の日に生家の両親，そして先祖に別れの挨拶をすませ，「実家の敷居をまたぐな」と言われて出立する。しかし，その後毎晩のように，夫や子どもを伴って生家を訪問するのである。この訪問は，「実家の敷居をまたぐこと」にはならないという。

「シュウトノツトメ」や「アソビニユク」は，年間を通して実施される。一日の仕事を終え，ときには風呂も済ませた後に，夫婦は連れ立って嫁の生家を訪問する。その際には特に姑などにことわることもなく，出かけていくという。嫁たちは裁縫道具などを持参することもあるというが，特に生家で仕事をするというわけではない。ともに出かけた夫は，嫁の両親と話をしたり，ときには酒を飲んでいる。

これらの生家訪問は，明確な規則が存在するわけではない。毎晩のように訪問する場合もあるが，それほど頻繁ではないとする事例もある。越沢における「シュウトノツトメ」は，夫婦がともに比較的頻繁に，結婚後長期にわたって実施されてきたが，高根における「アソビニユク」の場合には，個々の事例による差異が認められた。このことは，村落における制度としての拘束性が必ずしも高いものではないことを示している。

結婚当初は，頻繁に行われていた生家訪問も，時間の経過とともにその頻度を下げていく。これは，嫁の婚家での成員権の確立を意味している。また，家族周期の変化にも関連する。生家の母親や婚家の姑の死亡などにより，これらの訪問は中止されることが多い。また，子どもの成長による場合もある。

「シュウトノツトメ」や「アソビニユク」際には，多くの場合子どもたちを伴っていく。子どもたちは，夕食後に父親母親とともに，母方の祖父母のもとを訪ね，そこで寝るまでの時間を過ごす。特に，幼い頃には毎晩のように生家訪問が行われていた。嫁として婚家で懸命に一日中仕事をしていた女性たちは，夕食の後片付けをすませた後の数時間，生家で「何も気を使わなくてよい」時間を過ごした。子どもたちは，母親とともに祖父母のもとで話をしたり遊んだりして過ごし，母親の感情も手伝ってその心理的な距離は非常に近いものであった。母の生家を子どもたちは，「マゴノイエ」「バァベェ」と呼び，母親不在であっても頻繁に出かけて行き，成長後も行き来をする場所となっていた。

高根地区でも，かつての農作業は人手によるものであり，嫁は重要な労働力であった。さらに，婚家での主婦権は姑である家長の妻にあり，嫁は家事に関しても姑の指示のもとに行うことが原則であった。嫁たちは，昼間は田や畑での労働に携わり，夕方暗くなるまで外で仕事をしていた。そこでは，子どもたちの世話は婚家の祖父母の仕事とされていた。昼も弁当持参で農作業をする母親のもとへ，祖父母が子どもたちを連れて行き，そこで乳を飲ませていたという。

以上のように，高根の子どもたちは，昼間は父方の祖父母とともに過ごし，夜になると母方の祖父母のもとを訪ねるというように，父親母親と過ごす時間よりもむしろ祖父母とともに過ごす時間が長いような子ども時代を送っていた。現在でもその傾向は続いており，農業が中心ではなくなり，青年層は男女を問わず村上市街地を中心とした仕事に就くようになっているが，昼間両親が仕事にでかけて不在の間は父方の祖父母が子どもたちの世話をしている。子どもを背負った祖母たちは,「自分たちも姑さんに子どもをみてもらったし，子どもの面倒をみるのはおばあさんの仕事」と言う。近年「アソビニユク」ことはなくなったが，やはり嫁とその生家との関係は深く，子どもたちも母親の生家を「バァベェ」と呼び，しばしば訪問している。

下新保地区では,「センタクヤスミ」と言われる季節的長期里帰り慣行が存在した。これは,「センダクガエリ」などとも呼ばれる日本海沿岸地域に比較的広く分布する嫁の生家訪問である。「センダクガエリ」「センタクヤスミ」は，婚出した女性が田植えや稲刈り，正月など季節ごとに生家に20日間以上にわたって滞在することである。子どもが誕生すれば子どもたちも連れて生家を訪問した。その間に，嫁は自分と子どもの布団や衣類の調整を行う。それらは，嫁の生家の負担となるのである。女性たちと婚出後の生家との関係は，経済的な意味ももっていた。生家滞在中は，確かに女性たちは生家の労働を担っていたと言われているが，この慣行を女性の労働力の分配のみの問題としてとられることはできない。

下新保の「センタクヤスミ」は，毎年正月に20日間ほど嫁たちが生家に帰って滞在してくるものであった。しかし，その期間や時期などは各家の事情により決定された。下新保も村内率の高い地域であったが，世帯数があまり多くないこともあり，近隣の村落との通婚も行われていた。嫁たちは，村外からの婚入であっても，生家の村に「センタクヤスミ」の慣行があれば里帰りをした。嫁にいった村に「センタクヤスミ」がなくても，生家であれば帰ってきた。

「センタクヤスミは，ウチに帰って，休んでくることだ」と言われ，体を休めるためだと女性たちは考えていた。「センタクヤスミ」に行く時には,「ハンマイ」と称する米を婚家からもらって帰った。また「センタクチン」といっていくらかの金銭を持たされた。「ハンマイ」は，生家滞在中の嫁たちの食いぶちとされ,「センタクチン」は生家で嫁と子どもたちの着物などをつくるためのものとされた。しかし，いずれも決して十分ではなかったという。それでも，これらの存在は嫁たちの帰属が明らかに婚家にあることの証明でもある。「センタクヤスミ」の間に，嫁は自分と子どもたちの衣類一年分を準備してくる。「センタクヤスミ」の実施期間は，各家により異なっ

ているが，10年間というのは比較的長期にわたる方である。

下新保では，「センタクヤスミ」の間子どもたちも連れて嫁たちは生家を訪問した。やはり，この地域でも子どもたちは幼いころに毎年20日間という長期間生活を共にする母方の祖父母との情緒的心理的距離は近いといえる。しかし，むしろ「センタクヤスミ」は，婚出した女性にとっての生家の経済的支えという意味がうかがわれる。祖父母からみると孫たちは，日常的な世話をする対象であると同時に，衣類やその他の面倒をみる対象でもある。就学の際の準備なども，嫁の生家側に負うところが大きい。

下新保においても，嫁たちが重要な労働力と考えられていた点は同じであるから，毎日の子どもたちの世話は，同居する父方祖父母が行っていた。高根・下新保両地域において，子どもたちに祖父母が果たす役割は，日常的な世話という点は非常に大きい。加えて嫁が頻繁に生家を訪問するため，その子どもたちにとっても母方祖父母が持つ意味がある。高根では，ほぼ毎日のように訪問する祖父母との情緒的な距離は極めて近いといえ，下新保においては経済的な意味が加わるということである。

4．嫁の生家の持つ意味

頻繁に婚出した女性が生家を訪問する地域において，嫁の生家が高根・下新保という社会においてどのような機能を果たしてきたかを，祖父母と孫との関係からみていきたい。

婚出後にも生家との関係を緊密に持ち続ける地域では，母方の祖父母と孫の関係が，他の地域に比べて深い。日本社会･家族研究においては，「家」の継承という点から，親子関係の中でも家長と後継ぎの関係が重視されてきた。結果，隔世代関係においても相続継承に重点がおかれ，さらには三世代直系家族の形態の中で日常生活をともにすることから，直系の祖父母と孫の関係は検討されることがあった。しかし，かつての嫁たちも「二度と実家の敷居をまたぐな」と言われて婚出していても，情緒的心理的には生家の果たす役割は大きかったと述べることが多い。「雨が降って，農作業ができないときは実家に帰って休んだ」，「お腹がすくと，こっそり実家に帰っておにぎりを食べた」などという話を女性たちから聞くことは多い。それは，「家」原理との対立という点や，その機能を明確にすることの困難さから日本の家族研究の中で取り上げられることは少なかった。調査対象地域における嫁の生家訪問から，その点について検討してみたい。

高根・下新保両地域においても，村内婚が行われて，嫁の生家が同一村落内にある場合には，日常的に母方の祖父母も子どもたちの世話にかかわっていた。子どもの姿が見えないと「バァベェ」と呼ばれる母の生家をまず探した，と言われように，孫たちにとっても母の生家は生活の中に組み込まれていた。子どもたちは，成長とともに自分たちの世界をもち，遊びも同世代の子どもたちによって行われるようになるが，それでも母方の祖父母および母の生家は，緊密な存在

であった。

高根地区では，毎晩のように生家に「アソビニユク」ことは，嫁たちにとって心理的な支えとなっていたという。昼間の厳しい労働や成員権が確立するまでにはいたっていない婚家での立場は，嫁入り後間もない嫁たちにとっては緊張を強いられるものであった。それが，夕食後のわずかな時間とはいえ，生家に戻り，親たちと話ができることは精神的に十分な援助となっていた。夫を伴い，婚家からも承認された生家訪問は，社会の制度となっており，このことは嫁たちにとって生家が居心地が良いということに加えて精神的な安心を与えていたといえよう。そのことが，母方祖父母と孫の関係を一層強固なものにしていた。

高根地区においては，母の生家を「バァベェ」と呼ぶ。「婆の家」という意味だという。母方の祖父母の家のことで，世代が異なるとこの「バァベェ」が異なることになり，世帯主にとっての「バァベェ」とその子どもたちにとっての「バァベェ」が，同時に存在することになる。高根では，婚姻の際の仲人は嫁方の「バァベェ」に依頼するものとされている。つまり，母方のオジが仲人になるということである。妻方親族に仲人を依頼する点も注目されるが，女性たちは幼いころから頻繁に往来し，親しんだ母の生家が仲人になるということである。

下新保地区における「センタクヤスミ」は，日常的に孫たちが母の生家に滞在することとは異なるが，婚出後の女性とその子どもたちの衣類などに関する経済的負担をするという役割をもつ。季節的な生家訪問は，日本海沿岸地域を中心に比較的広く分布している。これらの地域では，娘を婚出させた後も生家の経済的な援助が続く。しかし，村落社会全体で実施されるこれらの制度は，一家の支出という点からはバランスを保つものである。婚出した娘たちとその子どもたちに関する衣類などの経済的負担は負うが，婚入してきた嫁とその子どもたちに関しては負担はしない。これは，通婚圏が拡大し，村内婚がなくなったことがこれらの制度の維持を困難にした所以である。

いずれの地域においても，嫁あるいは母の生家は「一番の親戚」と称されるように家間の関係は強固である。冠婚葬祭などの行事においても，嫁の生家は多様な形で役割をもっている。贈答についても形式にのっとった役割をはたしていかなければないのである。孫世代が世帯主となってからも，母の生家という形でその関係は続く。しかし，世代交代とともに母・嫁の生家は変化を見せるため，この関係は永続するものではない。

日本の「家」を考えた際に，婚入者としての嫁は後継ぎの母親という意味で「家」の先祖として祀られ，「家」の超世代的永続に貢献してきた。そして，女性の一生においてはその点が重視されてきた。しかし，高根や下新保のように，生家の娘として婚出後もその親子関係を保持し続けることがあった。これらは「家」原理と対立する関係性として検討がされている。嫁の頻繁な生家訪問は「家」原理とは矛盾するものであるが，むしろその存在が「家」原理の遂行を円滑にしているとも考えられる。村落内での家関係のバランスを保つという意味をもっているとの指摘も

ある。そこで，帰属という点ではあくまでも父方に属する孫が母方祖父母との関係を密接にすることにより，役割を果たしているといえよう。

婚出者による死者供養である奈良県旧都祁村の「トウマイリ」は，婚出者の子どもたちもかかわりを持つ。「トウマイリ」とは，旧歴の７月２日から７日までの間の定まったある一日に，その家の関係者が集まって親の仏に墓参することである。すなわち仏となった親に合うために「デアト」の家に集まるのである。この場合の親は，その両親はもちろん親の両親つまり祖父母も含まれるという。母親の生家での「トウマイリ」の際には，母親が生家に帰るのは当然であるが，母親が死亡している場合にはその家の跡取りが出かけていく。つまり，家を相続した者は母親の生家にも仏をもつことになる。これらの「トウマイリ」を共にする関係を親戚と考えるという。

また，親の供養を直系の子どもだけが行うのではなく，傍系も含めたすべての子どもによって行う位牌分けという慣行も存在する。家の先祖の位牌とともに婚入者である嫁の親の位牌も祭祀されることになる。ただし，これは世代を超えないことが原則である。

和歌山県紀ノ川流域にみられる「モライマツリ」は，死者がでた場合，その家ばかりではなく，死者の生家が仏の棚を作ることである。婚出した女性が死亡した場合に，婚家ばかりではなく生家でも祭祀されることである。

婚出した女性と生家との関係は，婚姻の成立を機に絶たれてしまうものばかりではない。生家から離家した者が生家とのつながりを維持していく慣行が，多様な形態で存在したということである。

5．結語

朝日村の高根・下新保地区では，婚出後も女性たちは頻繁に生家を訪問したり，経済的関係を維持していた。そのような地域においては，母方祖父母と孫との関係が重要な意味をもっていた。伝統的な日本社会にあって育児は，母親の仕事とは必ずしも考えられてはおらず，むしろ年齢のいった祖父母が担当するものであった。しかし，これらの地域では子どもたちは母の生家で過ごすことが多く，母方祖父母との接触が日常的に行われていた。従って，同居する父方の祖父母と同様にその関係は深いものであった。婚出後も女性たちが生家との関係を維持し続けることは，その子どもたちにも影響を与えていた。

高根地区においては，母の生家は子どもたちの成長の後に仲人を依頼する家にもなる。婚入者の生家が，儀礼の場や日常生活の場面において重要な役割を果たすことは多くみられることである。ただし，いずれの場合にも世代を超えることはなく，その点が「家」の枠組みとは異なる。婚出後の女性が生家の死者祭祀に関与する慣行の存在も報告されているが，これらも世代を超えるものではない。しかし，婚出女性のみではなく，その子どもたちまでは母の生家との関係を続

けていく。このような母方祖父母と孫との関係から，親族関係を再考する可能性があるのではないだろうか。

参考文献

蒲生正男　1960 『日本人の生活構造序説』 誠信書房
森本一彦　2006 『先祖祭祀と家の確立―「半檀家」から一家一寺へ―』 ミネルヴァ書房
中込睦子　2005 『先祖祭祀と位牌』 吉川弘文館
佐藤光民　1956 「羽越国境地方の婚姻制―シュウトノツトメを中心として」『日本民俗学』 3- 4
上野和男　1984 「日本の位牌祭祀について―『位牌分け』を中心として」『長野県民俗の会会報』
植野弘子・蓼沼康子　2000 『日本の家族における親と娘』 風響社
八木透　2001 『婚姻と家族の民俗的構造』 吉川弘文館